

じぶんき  
日々「暮らし」のなか



関根 節さん (水道町・82歳・無職)

例によって花の水くれから私の一日は始まる。花は生きていく。部屋の中に花がないと息苦しい。四季折々の草花を家の中に持ち込んで楽しんでいく。九時。これから自分の時間。何よりも先に新聞を広げる。見たい番組をメモするため。やがて九時半。「百万円クイズハンター」が始まる。朝茶を飲みながらの楽しい一時。頭の体操に

もなる。最近では参加者が若返ったためか、問題の内容も変わり、明治生まれの私にはちょっと歯が立たなくなっている。が、それなりにまた、得ることも多い。今日は部屋の中を徹底的に掃除。娘のくれたミニ掃除機が、とても役立つ。ふと部屋を見直し、何かしなくてはとつぶやく。一室、一世帯、物があふれている。地袋が窒息している。きれいな空箱が積み重なっている。手作り細工の材料がいつの間にか場所を占めている。何とかしなければと繰り返す。やらねばならぬことがたくさんある。やりたいことも、たくさんある。今しないといつできる。私がないで、だれがする。とつぶやく。私には素晴らしい友が何人かいる。大切な人たちである。四季折々小さな旅を楽しんでいる。去年の秋、忘れもしない九月九日、学生時代からの旧友をガン

で亡くした。くしくも本人の誕生日だった。心の支えを失ったようなショックだった。しばらくは何も手につかなかった。それ以来、遠くの世界のように思っていた来世が、身近に思えるような心境になっている。去る五月、関根の叔父が心不全で急死した。会葬の席で久しぶりに会わなかった叔母の痛々しいまでの老衰に愕然とした。考えてみれば私も八十三歳になろうとしている。何が起きてもお不思議ではないはず。とつぶやく。

市民談話室

原稿募集

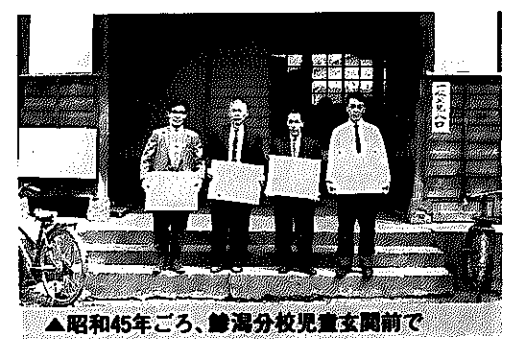
10月1日号の原稿を募集します。皆さんが日ごろ考えていることや身近な出来事など、気軽に投稿してください。字数は400字から500字程度とします。あて先は、〒950-12白根市大字白根1235 白根市役所 企画調整課 広報広聴係 (☎373-2111) (F333) です。



今は廃校になった鯉淵分教場。昭和十四年四月から十九年三月までお世話になりました。複式学級で、一、二年生一組と三、四年生一組でした。その年によっても違います。一、二年で五十六人という学級です。何しろ戦争さなかなので、今の子供たちは本当に幸せだと思えます。そのころ電話室の近くに運動場がありました。分教場へ電話がくると、どんなに騒がしく遊んでいても「電話」の一声で一斉に正座し、口を閉じます。よく訓練されていると同時に、私



白根小学校鯉淵分教場  
懐かしい思い出  
和田綾子さん (白井・82歳・無職)



▲昭和45年ごろ、鯉淵分校児童玄関前で



思い出の場所 苗名滝  
自然の偉大さに心洗われる  
山崎富士子さん (上中村・29歳・会社員)

あれはもう一年半前のことになるんだなあと、フツとあのときのことを思い出しています。一九八九年十月五日、ふと目にした一冊の雑誌との思いもかけない出会いから。ちよつと冒険してみようかなと思立ち、いざ妙高高原へと車を走らせたのです。視界に入ってくるすべての光景が初めてのものでした。何ともしがすがしい抜けるような青空の下。期待と不安が入り交じる中、マップ片手に海岸線を走り、窓を全開にしなが米山、柿崎、そして上越へ。国道18号線を抜け、

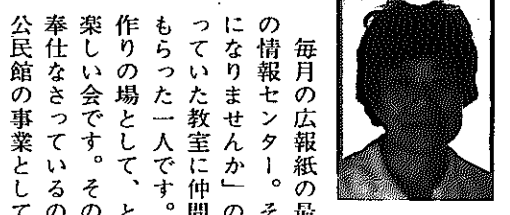
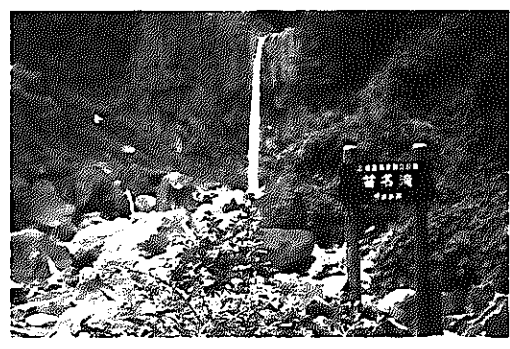
新井から中里村を通り、妙高高原町の平へと着いたのです。前方には妙高山が広がり、目の前にはいもり池と呼ばれる小さな湖畔がありました。その湖畔の周りには筆を執る人、シャッターを切る人。ここにいると周りの人も自分自身も一瞬時が止まったような、そんな錯覚さえ覚えるのでした。少し歩くと沿道はシラカバ林、そして冬のスキーシーズン待つようにベンション、ロッジ、寮など。しばらく車を走らせ、最後のコース苗名滝へ向かったのです。途中関川を渡る橋があつてつり



唱歌に感じる  
時代の流れ  
山沢美代子さん (根岸・39歳・パート)

新聞を見ながらテレビの音だけを聞いてみると「われは海の子」の歌が流れてきました。顔を上げると、合唱団のかわいの子供たちが歌っています。一緒に口ずさんでいると、およそ三十年も昔を思い出し、久しく会

つていない友人の顔などが、子供のころそのままに次々と浮かんできて懐かしさが込み上げてきました。娘に話したら、今はそんな歌は習わないとのこと。以前、歌詞が今の時代に合わないとか、その他の理由で消えていった唱歌が何曲もあったのを新聞で読んだ記憶はありますが、ちよつと寂しい気持ちになつてしまいました。



私の一言  
楽しい仲間への感謝  
中村菊代さん (根岸・64歳・農家)

毎月の広報紙の最後のページの情報センター。その「仲間になりませんか」の見出しに載っていた教室に仲間入りさせてもらった一人です。最後の友達作りの場として、とても心細く楽しい会です。その上、先生が奉仕なさっているのか、また、公民館の事業として予算があるのかは分かりませんが、親切に教えてくださる先生には頭が下がります。また、私は草花が大好きなのですが、手入れの仕方などがよく分かりません。同じ趣味を持った方々と、教えたり教えられたりの教室があつたらとてもすてきななあと、思います。

市民文芸

短歌

蝸牛まるく咲いたる紫陽花の  
雨にぬれにし葉の裏に這う  
小出よし  
東の間の晴れ間に繁く時雨  
つくつく法師の高き一声  
中村 京  
梅雨の間に豆苗植まむと古い妻の  
重き筆どり我も手伝ふ  
根岸 資郎

川柳

スツールに止まって憂さを晴らす酒  
竹石 甚五  
迷信を蹴飛ばして行く一人旅  
田中 成子  
チチ、ハハの法事が決める膳の位置  
田村 恒夫  
「風の子」と言えば泣く子も直ぐ黙る  
中村 尚治  
真夜中にロボット孤独の汗を拭く  
西条 ムラ  
晩酌の梯子が続く祭りの夜  
早川 英男  
平凡に終わった今日の皿を拭く  
山岡 フミ  
寝るだけ寝て披露の宴終わる  
米野 光雄  
長寿万歳楯山の椅子空いてます  
吉川 彰

年金の暮らしたに慣れた老夫婦  
荒木 イマ  
飲み代を妻から無担保で借りる  
今井 七郎  
服装でお部屋が決まる客選び  
織田 福治  
よく喋る客へ電話の助け舟  
織田 セツ  
ワンマンも孫に一目置いている  
後藤マサノ  
また逃げた客に横向く招き猫  
佐藤トミノ  
ふと亡父を思い出しての手内職  
佐藤 ヨキ  
三年目書く平成も板に付き  
高橋祐四雄

俳句

おもむろに紅にじみくるかき水  
成沢 素明  
冷奴藍の器と決めてあり  
和泉 伸子  
勤々と追ひ肥効きし大青田  
安沢 飛浪  
十分に陽をもらひたるトマトかな  
小林 光子  
水中花女ばかりの職場かな  
堀内ナナ子  
しも風の通り抜けゆく夏座敷  
豊木サダ子  
表刈機操る嫁を賞ひけり  
猪股 南魚  
わが星の珠にまたたきあて涼し  
公条 雪夫  
鈴付けし猫がぐりぬ顔の花  
木村 トリ  
梨畑に居らず桃畑にも居らず  
五十嵐寛吾  
(以上大風会)